

## 派生接尾辞 -ish の多義構造 (二)

—イメージ・スキーマの重ね合わせと焦点化にもとづく概念操作—\*

清水 啓子

(本稿は、清水 (2002) 「派生接尾辞 -ish の多義構造 (一)」に続くものである。)

### 4. 歴史的変化と認知プロセス

共時的言語学と通時的言語学という区別は、言語研究の方法上便宜的なものであり、実際には、歴史的な言語変化と歴史上のある一時点で切り取った共時的な言語構造の両方向からの汎時的 (panchronic) な考察が、人間の言語の実体を明らかにするためには不可欠であり、より正確な人間言語の記述・説明に役立つ。こうした汎時的な立場からの研究の重要性は、おそらくほとんどの言語学者が認めるところであったろう。しかし、ここ二十数年の間の認知言語学、特に多義語や意味拡張、文法化といった研究の進展により、言語の形式と意味のあいだに有契的な結び付きを追求するタイプの言語研究にとって、通時性と共時性をクロスオーバーするような汎時的言語研究が非常に重要で有意義な研究アプローチであることが明確になった<sup>1)</sup>。多義語の複数の意味が歴史的にどのような順序で発展してきたかを観察すると、そこには人間の認知システムが大きく反映されている場合がある。たとえば、Sweetser (1990:9) は (1) のように述べ、空間を表す語彙が時間を表すようになるという方向性は、人間の認知構造を理解するのに役立つことを指摘している。

- (1) ...the historical order in which senses are added to polysemous words tells us something about the directional relationships between senses; it affects our understanding of cognitive structure to know that spatial vocabulary universally acquires temporal meanings rather than the reverse.

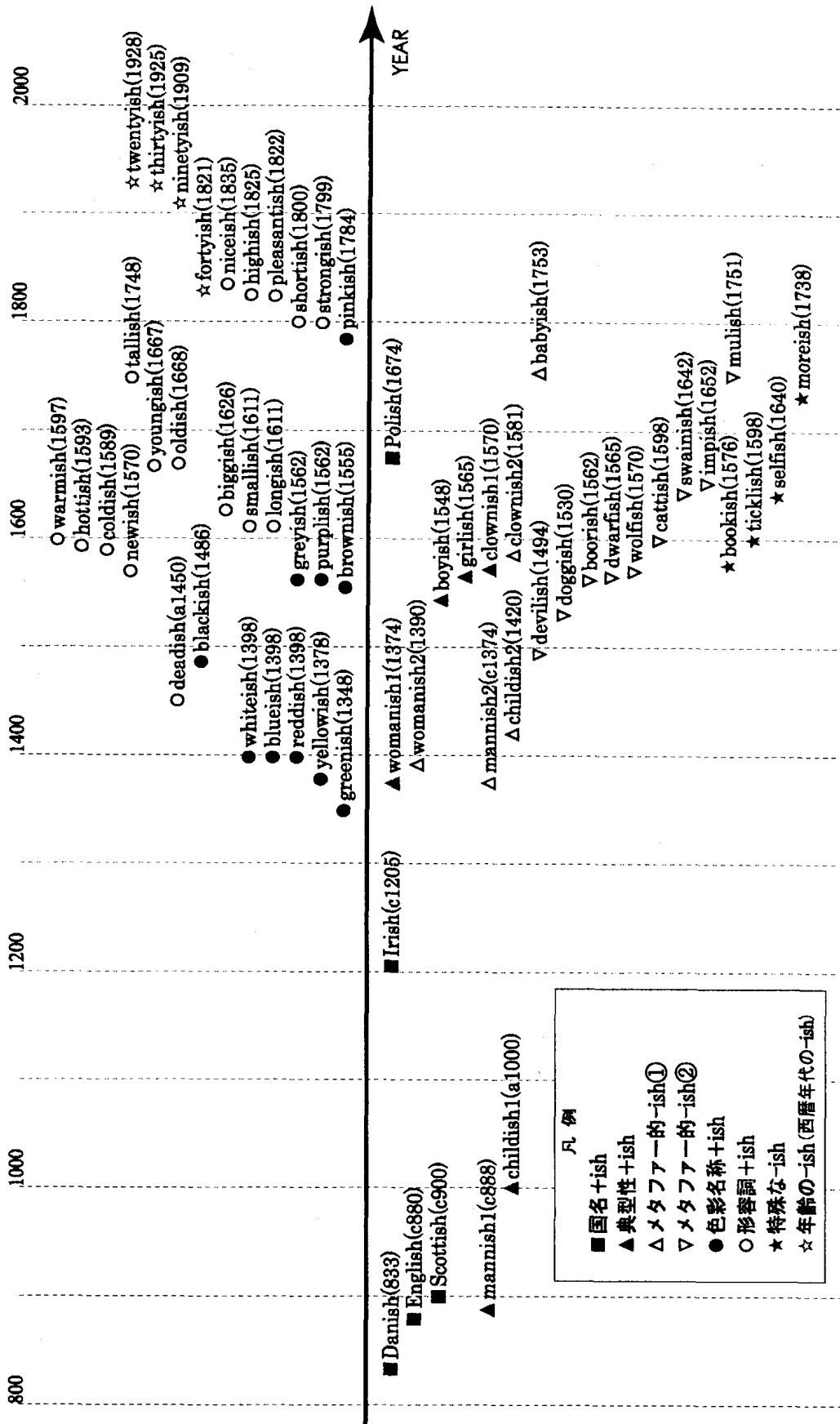
本稿では、英語の派生接尾辞 -ish の多義構造をその歴史的な発展順序との関連から考察する。意味変化の順序には根拠があるはずである。なぜそのような変化過程を辿ったのかという問いに対して、認知プロセスからの動機

づけを試みる。派生形容詞 Xish の歴史的意味変化を考察するために本稿で援用する概念的道具立ては、イメージ・スキーマである。Xish の歴史的発展の順序は、認知プロセスの単純なものから複雑なものへという段階に従う。言い換えると、単純なイメージ・スキーマ構造から複雑なイメージ・スキーマ構造への変化、あるいは認知処理操作の複雑化の順序がそのまま歴史的意味変化の順序に反映されている、ということになる。

#### 4. 1. -ish の歴史的意味変化の順序

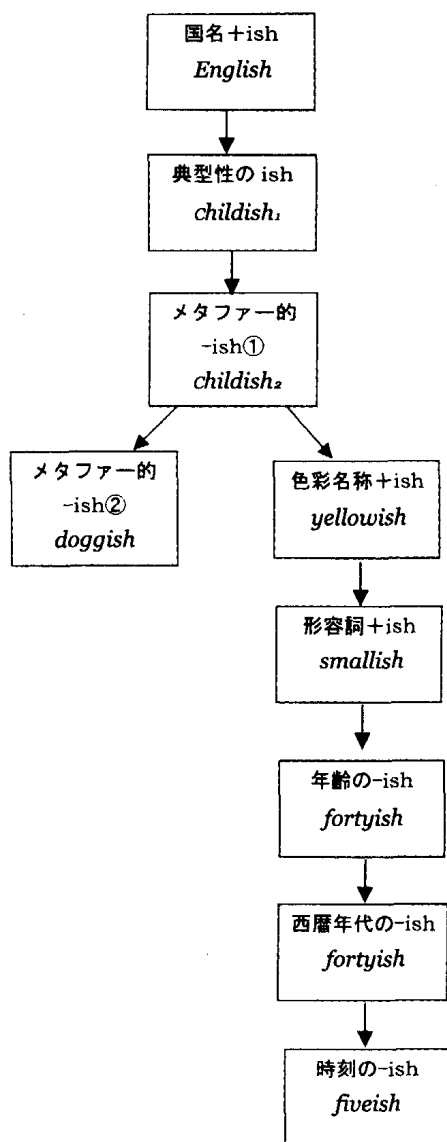
清水 (2002) であげた -ish の用法のうち、歴史的変化の過程の考察にあたり有意義と思われる代表的な用法を以下(2)のように8カテゴリーに分け、それぞれの用法の代表的なものについて、『Oxford English Dictionary 第2版 CD-Rom版』(以降OEDと略)で初出年を調べ、その歴史的発展の順序を明らかにしたく表1)。またその意味変化の連鎖についての仮説をく表2)に示した<sup>2)</sup>。

- (2)
- |                            |  |
|----------------------------|--|
| 1. 国名+ish                  | : English, Danish, Polish...   |
| 2. 典型性の-ish                | : mannish <sub>1</sub> , childish <sub>1</sub> , womanish <sub>1</sub> ... |
| 3. メタファー的-ish①             | : mannish <sub>2</sub> , childish <sub>2</sub> , womanish <sub>2</sub> ... |
| 4. メタファー的-ish②             | : devilish, doggish, mulish...   |
| 5. 色彩名称+ish                | : reddish, yellowish, blueish...   |
| 6. 形容詞+ish                 | : youngish, smallish, roundish...  |
| 7. 年齢の-ish (あるいは西暦年代の-ish) | : fortyish, fiftyish, ninetyish...   |
| 8. 時刻の-ish                 | : threish, fourish, noonish...   |



<表1>

〈表1〉と〈表2〉に示される-ishの歴史的展開について、認知言語学的な観点から見た場合、以下(3)のような興味深い疑問点をあげることができる。



〈表2〉

- (3) i. 国籍を表わす-ish (ex: *English*) は非段階的な離散的カテゴリーを表わすが、典型性を表わす-ish (ex: *girlish*) は段階性のあるプロトタイプカテゴリーである。この非段階性から段階性への推移はなぜ生じるのか。
- ii. 典型性を表わす-ishは、語基Xのカテゴリーに当てはまる成員を形容するが、同じ形式Xishが、Xカテゴリーには当てはまらない成員の叙述に使われる、つまり異なる領域のものの形容に使われるようになる。こうしたメタファー的な-ishが生じるのは、どのような認知作用によるものなのか。
- iii. 当初は名詞を語基として接続していた-ishが、形容詞にも接続するようになった。この様にN+ish→A+ishへと統語環境が拡大したのはなぜか。またそれに伴い接尾辞-ishの意味内容も大幅に変化するが、その変化にはどのように説明が可能か。

上記の(3i~iii)は、英語派生接尾辞-ishの多義性がどのように生じたのかという問題でもあり、同時に派生接尾辞という文法的要素の意味が拡張したという点では、文法化プロセス (grammaticalization) の問題でもある。清水 (2002) では-ishの共時的多義構造をメトニミー、メタファー、参照点構造といった認知言語学的メカニズムを援用して説明したが、本稿では、「イメージ・スキーマ」という概念構造に多くを負って、(3)にあげた歴史的

な意味拡張上の疑問点を説明することにしたい<sup>3)</sup>。それに先立ち、次節でまず「イメージ・スキーマ」について概観する。

#### 4. 2. イメージ・スキーマ (image schema)

イメージ・スキーマとは言語化/概念化以前に存在する認知能力の一つで、人間自らの身体的経験の繰り返しのなかから立ち現れてくる、知覚や運動の抽象的かつ動的パターンである。Johnson (1987) は、人間が自らの経験に有意味な構造を与え理性的に世界を把握するのにもっとも重要な役割を果たしているのは、人間自身の身体性、および外界環境との間で生じる身体経験から浮かび上がってくるイメージ・スキーマであると主張する。少し長くなるが重要であるので以下にJohnsonのイメージ・スキーマの定義を引用する。

- (4) An image schema is a recurring, dynamic pattern of our perceptual interactions and motor programs that gives coherence and structure to our experience. The VERTICALITY schema, for instance, emerges from our tendency to employ an UP-DOWN orientation in picking out meaningful structures of our experience. We grasp this structure of verticality repeatedly in thousands of perceptions and activities we experience every day, such as perceiving a tree, our felt sense of standing upright, the activity of climbing stairs, forming a mental image of flagpole, measuring our children's heights, and experiencing the level of water rising in the bathtub. The VERTICALITY schema is the abstract structure of these VERTICALITY experiences, images, and perceptions.

(Johnson1987:xiv)

- (5) ...in order for us to have meaningful, connected experiences that we can comprehend and reason about, there must be pattern and order to our actions, perceptions, and conceptions. *A schema is a recurrent pattern, shape, and regularity in, or of, these ongoing ordering activities.* These patterns emerge as meaningful structures for us chiefly at the level of our bodily movements through space, our manipulation of objects, and our perceptual interactions.

(ibid:29)

イメージ・スキーマにはどのようなものがあるのか、どの程度まで個別言語の枠を超えた普遍性があるのか、という詳細な研究はまだそれほど進んではないが、Lakoff and Johnson (1999:35) は例として、container と path に加えて、part-whole, center-periphery, link, cycle, iteration, contact, adjacency, forced motion, support, balance, straight-curved, near-far を挙げている。Johnson (1987:126) ではもう少し項目が多いが、こうしたリストに挙げられているどのイメージ・スキーマも構造は単純で、人が生活のなかで行う自らの行為や観察する他人の行為などの、きわめて基本的な具体経験の中にあふれている。しかし、こうした概念構造にもとづき、またそれらを操作することによって、私たち人間は日々の経験に構造を与え、それらを理解可能なものに分類し秩序立てているといえる。

知覚が、主体性を持った人間の活動によるものであるが故に動的であるのと同じく、イメージ・スキーマも固定されたものではなく、動的である。またある一つの事柄の概念化に唯一のイメージ・スキーマしかあてはめられない、ということでもない。むしろ、複数のイメージ・スキーマのあいだには自然な関連性があり、あるイメージ・スキーマの上に他のいくつかのイメージ・スキーマを重ね合わせる、あるいはイメージ・スキーマのある部分を前景化したり後景化することによって、「イメージ・スキーマ変換 (image schema transformation)」という認知的操作がなされることも可能である。

5節で、このイメージ・スキーマという認知概念構造およびその変換操作が、英語派生接尾辞 *-ish* の歴史的意味変化に重要な役割を果たしていることを詳説する。その際まず基本となるのは《容器 (container)》スキーマで、そこにインポーズされるあるいはそこからサブ・イメージ・スキーマとして抽出される center-periphery, near-far, scale などのスキーマが、*-ish* の新たな意味の獲得に重要な役割を担っている、と主張するつもりである。しかしその前にまず、イメージ・スキーマ変換について触れておく。

#### 4. 3. イメージ・スキーマ変換 (image schema transformation)

Lakoff (1987:440-444) は、複数のイメージ・スキーマの間には自然な相互関係があり、その相関関係が多くが多義語形成の動機付けになっていると言い、イメージ・スキーマ変換は意義が放射カテゴリーを形成する際に中心的役割を果たしていると述べている。Lakoff のあげるイメージ・スキーマ変換の代表的なものを以下にあげる。

(6) 終点焦点化変換 (end of path focus transformation) : 経路 (path) のイメージ・スキーマを含む言語表現が、その経路の終点 (end of path) に焦点を置くようになる変換。

- a. Sam walked *over* the hill. (経路) サムは歩いて丘を越えた。  
 b. Sam lives *over* the hill. (経路の終点) サムは丘の向こうに住んでいる。

(Lakoff1987:440)

(7) 連続体 $\leftrightarrow$ 複数個体の変換 (multiplex vs. mass transformation) : 明確な境界を持つ個体の複数の集合体のイメージ・スキーマと、境界が明確でない連続体のイメージ・スキーマの間の変換。以下 a では液体の流れを *pour* で表しているが、b では同じ動詞が複数の人間の集合の流れるような動きを表している。

- a. He *poured* the juice through the sieve. (連続体) 彼は漉し器を通してジュースを注いだ。  
 b. The fans *poured* through the gates. (複数個体) ファンが門からなだれ込んだ。

(Lakoff1987:441)

一方、Clausner and Croft (1999) は、こうしたイメージ・スキーマ変換をメタファーやメトニミーと合わせて、「概念把握の仕方の操作」(construal operations) と呼んでいる。終点焦点化変化では、経路のイメージ・スキーマの中でその焦点が終点に移動するので、Langacker の認知文法の枠組みでは「プロファイル・シフト」ということになる。経路というゲシュタルトをベースとして、その中で注目する箇所が移動するのである。また Clausner and Croft は、イメージ・スキーマもある種の領域 (domain) と考えることができるという。「腕」は「人体」という領域をベースとしてその意味がプロファイルされ、さらに「腕」の領域から「手のひら」をプロファイルすることができるように、イメージ・スキーマも領域をなし、いつも唯一のイメージ・スキーマが単独で存在するわけではなく、複数のイメージ・スキーマが実は重なり合って存在し、ある言語表現はその内のある特定のイメージ・スキーマに焦点をあててプロファイルしている、ということである。

ある概念にとってイメージ・スキーマとは一つしかないのではなくて、複数のイメージ・スキーマが同時に重ね合わさって存在することが可能である。

また、複数の可能なイメージ・スキーマのうちのどれかを前景化して強調したり、他のイメージ・スキーマを後景化して目立たなくすることも、認知操作として可能である。(8)および(9)は、《中心—周辺(center-periphery)》スキーマには同時に《近—遠(near-far)》スキーマも共発生(co-emerge)するという指摘である。

- (8) In addition to image schemas being pervasive in experience, many image schemas are experienced together. Johnson (1987) describes this as a superposition of [image] schemas, using the example of things which we co-experience as both near us and central to our vantage point vs. things far away and peripheral.

(Clausner and Croft 1999:15、下線:筆者)

- (9) The center-periphery schema is almost never experienced in an isolated or self-contained fashion... Given a center and a periphery, we will also experience the near-far schema as stretching along our perceptual or conceptual perspective. (Johnson 1987:125、下線:筆者)

以下5節で-ishの多義構造を考える際に重要となるのは、《容器(container)》イメージ・スキーマと《スケール(scale)》イメージ・スキーマなのだが、(8)(9)に指摘されている様に、この2つのイメージ・スキーマは相互に排他的なのではなく、実はカテゴリーという概念に、特にプロトタイプ・カテゴリーの概念化には常に共発生しているのである。

## 5. 派生接尾辞-ishの歴史的意味変化とイメージ・スキーマ

### 5. 1. 離散的カテゴリーからプロトタイプ・カテゴリーへ —Englishからchildish<sub>1</sub>へ

Xishという派生形容詞でまず最初にあらわれるのは、「国名+ish」、たとえば *English* や *Danish* などである<sup>4)</sup>。その次にあらわれるのは「普通名詞+ish」だが、その中でも「人間の性別や、特定の成長段階を示す普通名詞+ish」として分類できるグループがまず存在する。たとえば *mannish*、*boyish* や *childish* などである。*childish* の場合は実際子供のことを指して「子供らしい」という意味の場合と、すでに子供ではない大人を形容して「子供っぽい」



という批判を込めた意味を表わす場合があり、清水 (2002) では前者を「典型性を表わす-ish」とし後者を「メタファー的な-ish」として区別した。ここでは前者の場合を *childish*<sub>1</sub>、後者の場合を *childish*<sub>2</sub> と表記して区別する。

この節で説明する Xish の意味変化は、以下のように例示できる。

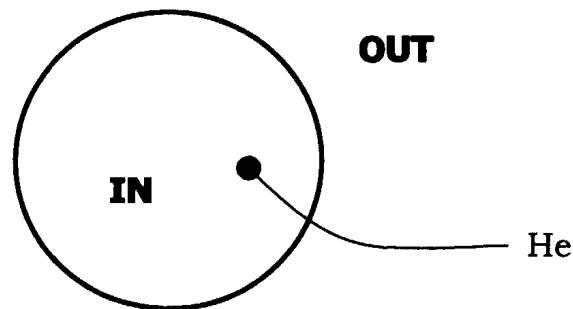
- (10) a. His nationality is (\*very/\*so) English.  
 b. These are (\*very/\*so) English ships.<sup>5)</sup>
- (11) a. He is very/so *childish*<sub>1</sub>.  
 b. His haircut was very/so *boyish*<sub>1</sub>.

(10) の *English* は国籍や製造地を示すので非段階的形容詞であり、この Xish で形容されるカテゴリーはいわゆる古典的カテゴリーで、所属成員のあいだで成員性の程度差は存在しない。一方 (11a) の *childish*<sub>1</sub> は、程度を表わす副詞 *very* や *so* で修飾できることから明らかなように段階性をもつ形容詞であり、この *childish*<sub>1</sub> で形容されるカテゴリーは、*childishness* という特性の程度において段階性のあるプロトタイプ・カテゴリーを形成する。(11b) の *boyish*<sub>1</sub> についても同様である。

(10) の離散的、非段階的カテゴリーから (11) の段階的なプロトタイプ・カテゴリーへの変化は、「イメージ・スキーマの重ね合わせ (superposition of image schemas)」というプロセスによって説明できる。ある一つ概念に対して唯一のイメージ・スキーマが対応するわけではない。それは「リンゴ」という単語の意味は、複数のさまざまな領域 (domains) を背景にして成立していることと類似する。リンゴには、例えば、「くだもの」「植物」「料理方法」「栽培方法」「流通」「色」「形」などの概念領域が錯綜している。同様に、ある概念にとってイメージ・スキーマは一つしかないのではなく、複数のイメージ・スキーマを同時に重ね合わせて概念化することが可能である。逆に言えばある経験の中には複数のイメージ・スキーマが同時に共存する。また 4.3 節で述べたように、複数の可能なイメージ・スキーマのうちどれかを前景化したり他のイメージ・スキーマを後景化することは、他の意味領域で行っているプロファイル・シフトとまったく同様の認知操作なのである<sup>6)</sup>。

非段階的カテゴリーをつくる *English* と段階的カテゴリーをつくる *childish*<sub>1</sub> の内部構造をイメージ・スキーマの観点から分析してみよう。まず、何らかのカテゴリーを概念化する際に基本となるのは《容器 (container)》スキーマ

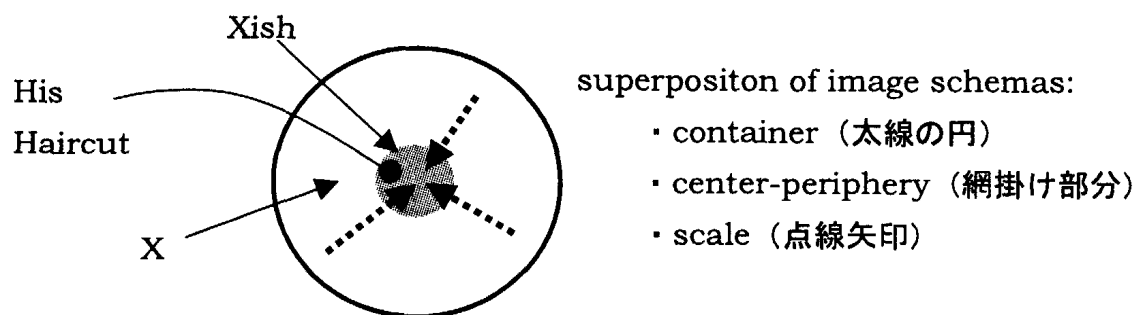
マである。以下〈図1〉のように、《容器》スキーマは、閉じた線によって区切られる《中と外 (in-out)》スキーマをその定義として含む。これが「A」として認められる要素をあらゆるカテゴリー構造であるとする、「中」であれば「A」であり、「外」であれば「非 A」という古典的カテゴリー構造に対応する。*English*というカテゴリーをあてはめれば、*He*で指示される人物がこのスキーマの内側の要素なら、*He is English.*となり、外側の要素なら *He is not English.*と表現される。注意すべきは、〈図1〉の《容器 (container)》スキーマにはまだ「段階性」という概念はない、ということである。ここで概念化されているのは《中と外 (in-out)》のイメージ・スキーマだけである。したがって、この時点でのイメージ・スキーマは単純で、内部の要素同士間にカテゴリーへの帰属度の段階的差異はなく、*He is very English.*という表現はできない<sup>7)</sup>。



〈図1〉 《容器 (container)》スキーマ (*He is English.*)

では (11b) *His haircut was very boyish.* における *boyish* という派生形容詞の段階性はどの様にして生じるのであろうか。典型性を表わす段階的形容詞 Xish のイメージ・スキーマは、〈図2〉のように示される。語基 X という名詞は X カテゴリーを想起させるので、《容器 (container)》スキーマが概念化される。さらにこのスキーマに《中心と周囲 (center-periphery)》をインポーズすることで、X カテゴリーの中心にはもっとも典型的な X メンバーが位置し、あまり X らしくないメンバーが周辺に配置されるプロトタイプカテゴリー構造を持つように内部構造が再構成される<sup>8)</sup>。このことによって必然的に、「boyらしさ」という特性に関する、周辺から中心にいくほど程度の強くなる《尺度 (scale)》のイメージ・スキーマが浮かび上がってくるはずである。段階性形容詞はすべてこの《尺度 (scale)》スキーマをその領域 (domain) に持つ。《容器 (container)》スキーマ内にある任意の 2 つの要素

AとBについて、Aはより中心に近く、Bは周辺に位置するように概念化されるならば、*A is more Xish than B.* あるいは *B is less Xish than A.* といえる<sup>9)</sup>。



〈図2〉 典型性の-ish (His haircut is very *boyish*.)

「典型性の-ish」の概念化に関わっていると思われる複数のイメージ・スキーマを〈図2〉の横に列挙したが、これらの複数のイメージ・スキーマのうち、「典型性の-ish」によってもっとも前景化されているのは、中心へ向かう《尺度 (scale)》である<sup>10)</sup>。またこの場合《尺度 (scale)》スキーマが存在しても、それは *young—old* や *big—small* のように一次元 (one-dimensional) の一本の scale には集約されない。たとえば *boyish* の場合、*boyishness* という特性が一次的には決定できない、つまり容姿であったり、振る舞いであったり、声であったり、考え方であったりと、多次元 (multi-dimensional) である<sup>11)</sup>。しかし〈図2〉では、まだカテゴリーの境界は明確に存在する。Xでないものに対してXishといえるような、類似性を表わす「メタファー的な-ish」(ex: *Mary is boyish*) をこのイメージ・スキーマで説明することはできない。では〈図2〉のイメージ・スキーマからどのような認知プロセスあるいは概念化の操作 (construal operation) を経れば、*Mary is boyish.* に例示されるメタファー的な *boyish* の用法に至るのであろうか。このことを次節で考察する。

## 5. 2. 典型性の -ish からメタファー的な -ish への変化

典型性の -ish とメタファー的な -ish との違いについて次例をみられたい。(12a) は典型性の *boyish* で (12b) はメタファー的な *boyish* である。

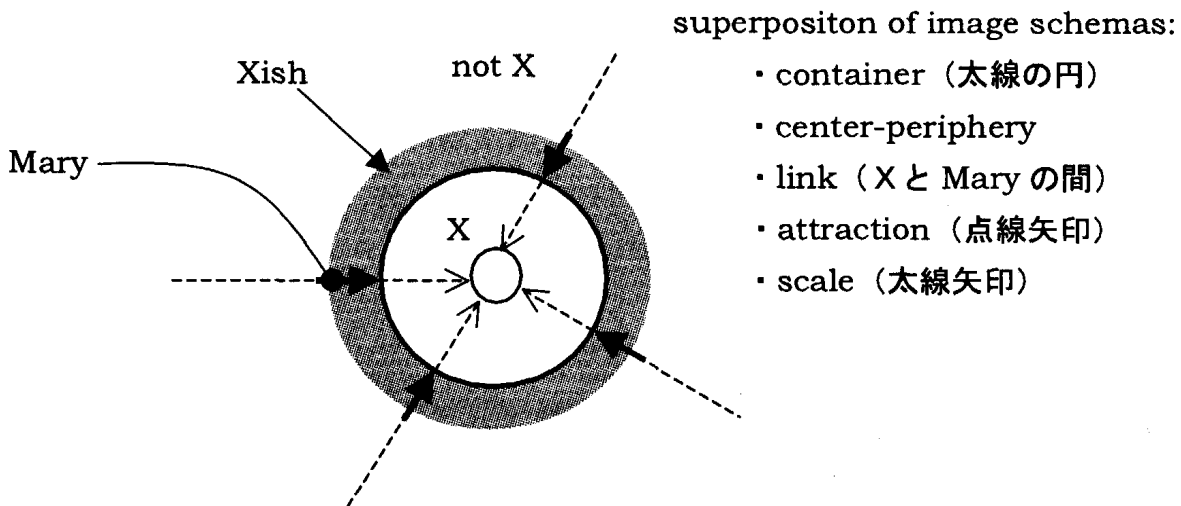
- (12) a. Tom is a fifth grader and has a typical *boyish* voice.  
 b. Rachel has a *boyish* voice.

前掲の〈表1〉(p.49)からわかるように、*childish*の場合、OEDによると、典型的な子供らしさを表わす用法がメタファー的で否定的ニュアンスをもつ「子供じみた」という用法に先立って現れる。現代英語では前者の「子供らしい」という肯定的な意味では *childlike* が使われることが多く、意味の違いが異なる形式によって分担されている。しかし、この *childish* の意味変化にみられるような、典型性からメタファー的な用法への拡張順序は、認知プロセスと歴史的意味変化の関連性という観点から考えると非常に興味深い。典型性とは、ある X カテゴリーに際立って認められる特徴である。またメタファーとは、X カテゴリーの要素と非 X カテゴリーの要素のあいだに、何らかの類似性を見出すことが前提となる。典型的特徴の認知がメタファー認識に先立つという認知プロセスの順序が、Xish の意味拡張の順序に反映されているといえる。また、典型性の認識をメトニミー・プロセスと解釈するなら、ここで、メトニミー・プロセスとメタファー・プロセスという2つの認知的プロセスが密接に結びついているという事実も指摘できることになる<sup>12)</sup>。

では、典型性をあらわす Xish からメタファー的な Xish への変化には、何らかのイメージ・スキーマ上の操作が働いているのであろうか。ここでもやはり、イメージ・スキーマ変換（あるいは概念化の操作）が意味変化に重要な役割を果たしている。さらに同様のスキーマ変換によってなぜ接尾辞 *-ish* が時代を下ると語基に形容詞を取るように変化するのか、ということをも統一的に説明することができるのである。ここではメタファー的な Xish の意味を説明するのに、X カテゴリーから非 X カテゴリーへの転写 (domain mapping) というメタファーの捉え方をそのままイメージ・スキーマ化する方法はとらない。メタファーが基本的に異領域間の転写であることは十分認められた上で、しかし異領域間の転写という道具立てに拠らないならば、概念空間の中での表象として、どのようなイメージ・スキーマが想定可能であるか、またそれらのイメージ・スキーマによって *-ish* の多義構造の一貫的な説明が可能となるかどうか、という2つの観点から考察をすすめる。

典型性を表わす Xish のイメージ・スキーマは、前節の〈図2〉(p.57)を参照されたい。一方、メタファー的な Xish は、X カテゴリー以外の要素を形容するので、〈図3〉のように、形容される対象（たとえば例文 *Mary is*

boyish の Mary) は、まずX (boy) カテゴリーと関連付けられて概念化される。MaryとX (boy) カテゴリーが結びつけられる際には《つながり (link)》イメージ・スキーマが基盤になる<sup>13)</sup>。MaryはカテゴリーXの外側かつ境界線の近くに位置するとみなされる。心理的空間において、Xに似た要素がXカテゴリーの周辺に配置されるという想定は、ゲシュタルト心理学における「ゲシュタルトの法則」のうちの「類同の法則 (factor of similarity)」にもとづく。ゲシュタルトの法則とは、知覚要素を認知的に構造化するさいに、無意識のうちに全体的に安定したまとまりのある構造として体制化しようとする要因である。その中のひとつである「類同の法則」とは、同じ種類のものがまとまって知覚されるというもので、ここでは心理的な概念空間において、Xカテゴリーにあてはまらない非Xの要素が、〈図3〉のようにXに「引きつけられ (attracted)」、《容器》スキーマであらわされるXカテゴリーの周辺に心理的に配置される、ということになる。〈図3〉においては〈図2〉とは異なるイメージ・スキーマの重ね合わせがなされている。非Xの要素をX周辺に引きつけるのは類似性に基づく心理的な力であり、非XとカテゴリーXとの間の《つながり (link)》の距離を縮めようとする概念化作用である。これに対しては《引き寄せ (attraction)》というイメージ・スキーマが想定できる<sup>14)</sup>。



〈図3〉 メタファー的な ish (Mary is boyish.)

〈図3〉では container、center-periphery、link、attraction、scale のイメージ・スキーマがインポーズされている。ここで問題にしている「メタファー的な-ish」の意味として最も前景化されているのは、Xカテゴリーの中心へ

向かう scale (図3では太線の矢印)である。この scale 上、X に近ければ近いほど more Xish であり、遠ざかれば遠ざかるほど less Xish となる。

〈図2〉で表された「典型性の-ish」と異なり、この場合のスケールは X カテゴリーの内部には入らない。しかし〈図2〉と同様、スケールの存在とその方向の参照点となっているのは、X カテゴリー内の中心に位置するプロトタイプである。〈図3〉において重なっている5つのイメージ・スキーマはすべて、このメタファー的な Xish の意味構築に必要な概念構造であるが、結果として最終的に最も重要なのは、この5つのイメージ・スキーマの合成 (superposition of image schemas) を経て最終的に浮かび上がってくる《尺度 (scale)》スキーマである。その意味で、他の4つのイメージ・スキーマ (container、center-periphery、link、attraction) は後景化された領域と呼べるかもしれない。あるいは Langacker の認知文法に従うと、scale スキーマがプロファイル (profile) であり、他の4つのスキーマはベース (base) であるということもできる。また先の「典型性の-ish」のイメージ・スキーマ〈図2〉と比較すると、この「メタファー的な-ish」〈図3〉の方が、重ねられるスキーマが多くなり (link、attraction)、複雑化している。これは「典型性の-ish」よりも「メタファー的な-ish」のほうが認知プロセスが多くより複雑になっていることを意味する。認知処理の複雑さの順序が意味変化の順序に反映されている、とみなすことができる。このことはさらに、メタファー・プロセスの前提としてメトニミー・プロセスが存在しなければならないという見解 (Heine, Claude and Hünemeyer 1991など) にも一致する<sup>15)</sup>。

### 5. 3. 名詞接続の-ishから形容詞接続の-ishへの変化

派生接尾辞 -ish は当初名詞に接続していたが、形容詞にも接続するようになった。OEDにおいて「形容詞+ish」の初出年は16世紀後半から始まる。本節では、どのような要因によって -ish が名詞接続から形容詞接続へと適応範囲を拡大したのかという、一種の文法化ともいえる問題について、やはりイメージ・スキーマとその合成および変換という概念化操作の観点から考察する。

#### 5. 3. 1. 媒介としての色彩カテゴリー

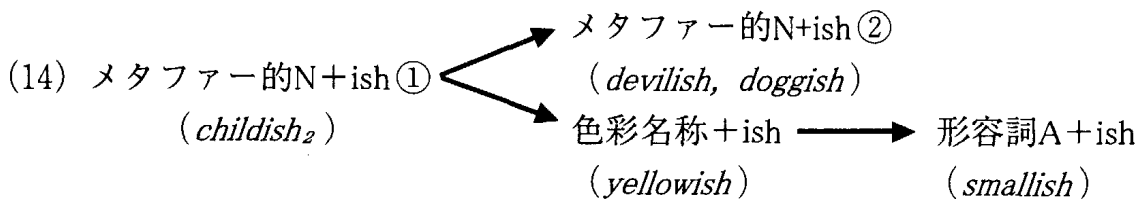
OEDの初出年をあらわした〈表1〉(p.49) からわかるように、名詞+ish (以降 N+ish と略) から形容詞+ish (以降 A+ish と略) が出現するまでの間に、「色彩名称+ish」というパターンが存在する。本節では、N+ish から

A+ish への -ish の統語環境の拡大は直接的に連続しているのではなく、この「色彩名称+ish」パターンが仲介役となっているという事実に対して、ではなぜそれが意味変化として自然な流れであるのかを認知意味論の立場から考察する<sup>16)</sup>。

ある文法的言語形式 F の意味が A から B に変化する際、単純に A→B と変わってしまうのではなく、以下 (13) に示されるようなプロセスを経る。まず A と B の両方の解釈が可能な曖昧な用法が媒介として存在し、その結果 B という再解釈が定着していくと、徐々に意味 A が漂白 (bleaching) されて、元々は顕在的でなかった意味 B だけが形式 F に張り付き、意味変化が起こる (Heine, Claudi and Hünnemeyer (1991:74)、Hopper and Traugott (1993) など)。

$$(13) \quad A > \left\{ \begin{array}{c} A \\ B \end{array} \right\} > B \quad (\text{Hopper and Traugott 1993:36})$$

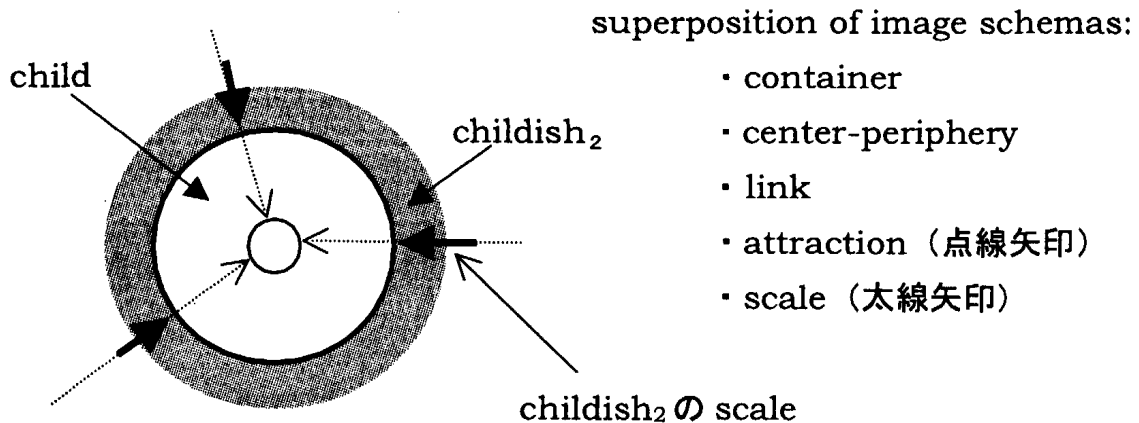
このように変化の中間段階として解釈が曖昧となる事例があるという考え方が、-ish の場合にも当てはまる。N+ish から A+ish への -ish の統語的接続環境の拡大は、(14) のような順序を経て生じたと考えることができる。メタファー的 N+ish を ① と ② に区別したのは、〈表 1〉によると devilish, doggish といった典型性の用法を持たない -ish は「色彩名詞+ish」よりかなり遅れて出現するためである<sup>17)</sup>。



メタファー的な N+ish (*childish*<sub>2</sub>) から、A+ish (*smallish*) への変化は、イメージ・スキーマという観点からも大きな変換を意味する。child カテゴリーは《容器》スキーマでありかつ多次元的 (multi-dimensional) であるが、small という形容詞が表す特性は《尺度 (scale)》スキーマでありかつ一次元的 (unidimensional) である。こうした意味構造における急激な変化・推移が直接的に連続して発生する可能性はまず低い。実際 OED の初出年のデータからも「色彩名称+ish」が中間段階として存在する。以下では、*childish*<sub>2</sub> → *yellowish* → *smallish* に具現される -ish の意味拡張の認知プロセスに対し

て、イメージ・スキーマの観点から詳細な考察を与える。

前節でも示したように、*childish*<sub>2</sub> では、その語基 *child* という名詞カテゴリーから《容器 (container)》スキーマが喚起される。これはメタファー的な用法なので、*child* カテゴリーに含まれない要素 (非 *child*) を形容するものであることから、〈図4〉のように表わされる (前述の図3を説明のため繰り返す)。ここではまず *container* スキーマがベースとなっており、その上に *center-periphery*、*attraction*、*link*、*scale* がインポーズされ、結果として派生する *childish*<sub>2</sub> がプロファイしているのは《尺度 (scale)》スキーマ (〈図4〉の太線の矢印) である。



〈図4〉 メタファー的な *childish*<sub>2</sub>

次に「色彩名称+ish」、たとえば *yellowish* の概念構造を考えてみたい。そのためにはまず「色彩」とは一体どのような概念構造を持つのかを考察する必要がある。英語の色彩用語の文法カテゴリーを考えてみよう。統語環境 (syntactic distribution) から文法的カテゴリーが決定されるという立場からすると、英語の色彩用語は名詞としても形容詞としてもふるまう。(15a) では形容詞として使われ、(15b) は名詞である。

- (15) a. I bought a *yellow* sweater. The roof of his house is *yellow*. (形容詞)  
 b. I like bright *yellow*. *Yellow* is my favorite color. (名詞)

しかし、単純に色彩用語の文法的カテゴリーが名詞でもあり形容詞でもありえるからという統語的事実だけから、この「色彩名称+ish」が媒介して、-ish の接続環境が「形容詞+ish」に広がったという安易な説明で、言語変



化の事実とその要因が本当に明らかになったとは言えない。認知言語学がその説明原理に求めるのは、人間の概念構造や認知メカニズムであり、自律的統語論が依拠する「名詞」「形容詞」といった言語のラベル（記号）のアルゴリズム的操作ではない。

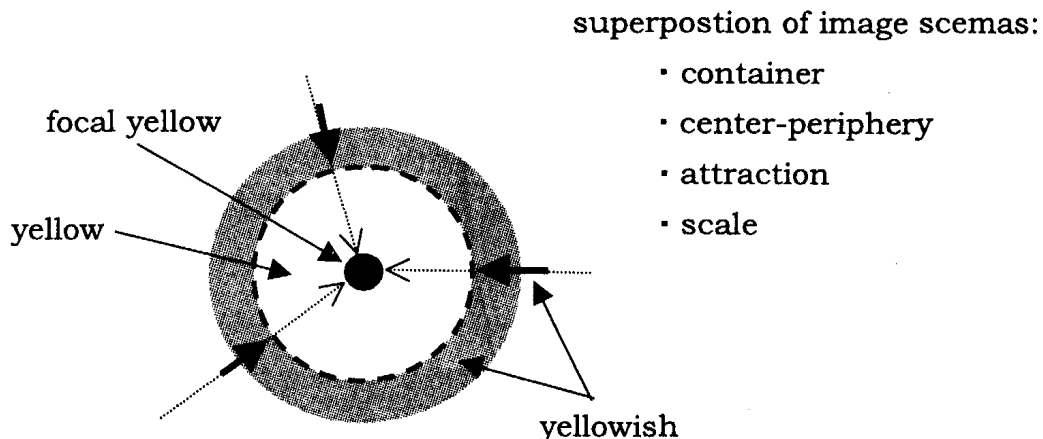
では、色彩カテゴリーとは一体どのような概念構造を持っているのだろうか。認知意味論では、言語の意味はそれ自体が独立して存在するのではなく何らかの背景知識に照らし合わせた形で存在すると考えられている。この背景知識の呼び方は研究者によって異なり、domain、frame、idealized cognitive model といった用語が使われるが、おおよそ同じような概念構築と考えられる。Langacker の認知文法の枠組みにもとづけば、たとえば、[KNUCKLE] の領域 (domain) は [FINGER]、[FINGER] の領域は [HAND]、[HAND] の領域は [ARM]、[ARM] の領域は [HUMAN BODY] と漸次領域を拡大して概念化することができる。最終的には「3次元空間」のような基本領域 (basic domain) で行き止まる。「色彩空間」も「時間」「空間」とともに基本領域とされる (Langacker 1990:4)。また色彩カテゴリーの概念構造について Clausner and Croft (1999) は次のように述べている。

- (16) Langacker (1987) analyzed a color profile as a restricted region (location) within the three dimensions of hue, brightness, and saturation. Concepts such as blue and red are principally profiles of hue, whereas black, white, and gray are largely restricted to the brightness dimension (1987:190). Color concepts are calibrated relative to local reference points, of which the so-called “focal colors” are likely candidates. Color terms function like proper names for different locations in the color domain (i.e., the focal colors). (Clausner and Croft 1999:12)

色彩は色相 (hue)、明度 (brightness)、飽和度 (saturation) という三次元の要素によって決まる。ある一つの色は色彩空間のある一定の限定された区域 (region) を占める。色彩は基本領域とされ、より上位の領域に抱合されることはないが、人間は色彩のみを唯一単独に経験することは少ない。日常生活において色彩は何らかの「モノ」に付随して経験される。モノに付随した視覚情報としての色彩は属性として形容詞で表される。一方色彩のみを抽出し独立して「モノ」として概念化すれば名詞で表現される (Langacker 1999:11)。そして (16) の後半に述べられているように、人間はある色彩を、

別の色彩との境界線をひくことで認知するのではなく、焦点色 (focal color) をプロトタイプとして、それにどれほど似ているかで判断している (その判断に実際に関与するのは3次元のパラメーターの相互作用であろうが)。このことは、*childish* の意味が典型的なchildの特性を参照点として決定されるのと平行する。色彩の判断も典型的な色を参照点とするカテゴリー化である。

ここで「色彩名称+ish」の一例として *yellowish* という派生形容詞の意味がどのように構築されているのかを考えてみたい。ある色彩は3次元のパラメーターを持つ色彩空間の中の一部を占めるとみなせる。*yellowish* という語彙を聞けば、以下の〈図6〉のようにまず語基である yellow カテゴリーが想起される。この yellow カテゴリーは、黄色の焦点色を中心とした境界の不明確なファジー・カテゴリーである。〈図6〉では、境界が不明確なことを《容器 (container)》スキーマの外枠を点線にすることによって示す。中心が焦点色の yellow であり、周辺にいくに従って典型的ではない yellow の色合いを帯びてゆくような yellow 空間を想定する。yellow でなくなる境界が不鮮明であるということから、この yellow カテゴリーの外側周辺には yellow に似通った色合いが、その類似性によって yellow カテゴリーの周辺の概念空間に配置されていることになる。どこまでが *yellow* と呼べるか自体が曖昧であるから、どこからどこまでが *yellowish* と言えるのかという判断もある程度の恣意性を免れえないが、〈図6〉の薄い陰の部分 *yellowish* に似た色彩の部分、つまり *yellowish* とカテゴリー化される部分である。〈図6〉には *yellowish* の《尺度 (scale)》を表す矢印をとりあえず3本描いたが、実際の *yellowish* は外側から中心に向かう無数のスケールが占める空間 (薄い陰の部分) である。ここでは、yellow を《容器 (container)》イメージスキーマに基づき二次元空間として概念化しているので複数のスケールが多次的に存



〈図6〉 色彩名称+ishにおけるイメージ・スキーマ (ex. *yellowish*)

在し、一次元的なスケールには集約されない。〈図6〉の yellowish である部分は、yellowish pink、yellowish green、yellowish white、yellowish gray など、様々な可能性がある。

先に、文法化現象と -ish の多義構造の拡張には平行する点があると述べた。(13) で、ある文法的要素の意味が A から B に拡張する場合、A と B の両方に解釈できる曖昧な用法が存在することを指摘した。たとえば、接続詞 *since* には (17) のように時間的意味 (temporal) と因果関係 (causal) の二つの意味がある。

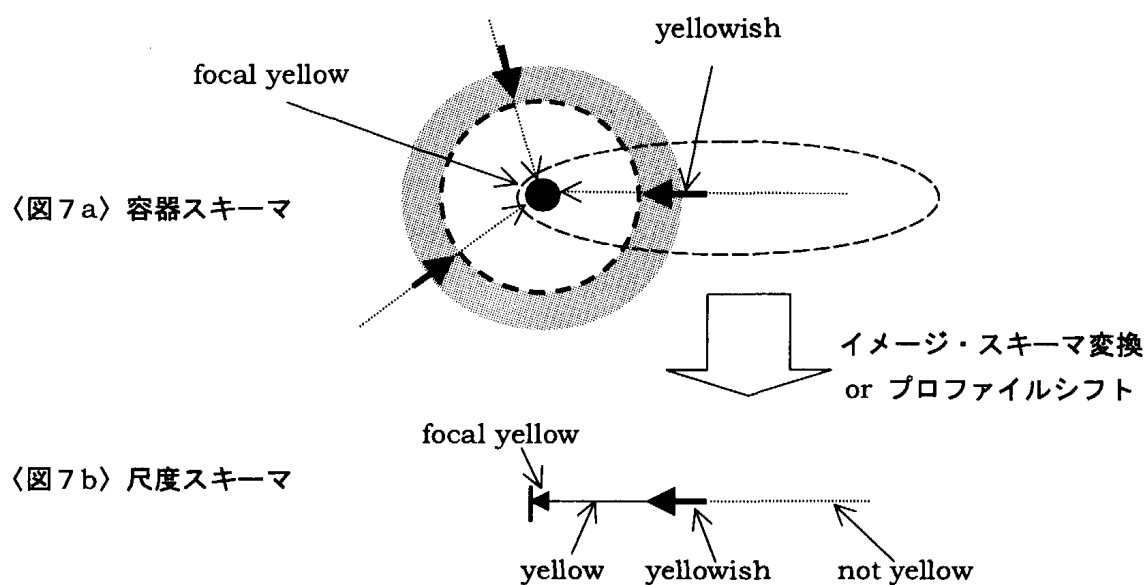
- (17) a. I have done quite a bit of writing since we last got together.  
(temporal)
- b. Since I have a final exam tomorrow, I won't be able to go out  
tonight. (causal) (Hopper and Traugott 1993:74)

一方、(18) は時間的意味と因果関係の両方の解釈が可能な文である。

- (18) Since Susan left him, John has been very miserable. (temporal or causal)  
(ibid.)

(18) の *since* は、Langacker の認知文法流に言えば、時間領域と因果関係領域の双方が関与していると言え、文法化による意味拡張も二つの領域のうちどちらに焦点をあてるか、つまりプロファイルするか、というプロファイル・シフトの問題として扱うことができる (Langacker 1999: Ch.10)。それと同様に *yellowish* についても、複数のイメージ・スキーマをベースとしたイメージ・スキーマという領域でのプロファイル・シフトという考え方をあてはめることができる。以下の〈図7〉において、すでに存在する用例である *childish* や *boyish* の概念構造と同様に考えればまず〈図7a〉のように《容器 (container)》スキーマにもとづいて概念化することができる。しかし、*yellowish* の場合、*childish* や *boyish* とは異なるイメージ・スキーマを見出すことが容易にできる。ある色彩のカテゴリー化には、色彩領域のなかの広い区域ではなく、ある一点と同定されればよい。参照点である焦点 yellow と、カテゴリー化の対象となっている特定の色の2点間の比較であり、その類似性の距離である。焦点 yellow に近ければ近いほど yellow としてカテゴリー化される。この場合のイメージ・スキーマは二つの色の間の成立する《つながり (link)》と、それに方向性と価値を与える一次元の《尺度 (scale)》で

ある〈図7b〉。注意すべきは、この一次元のスケールは、《容器》スキーマの中に見出されるものである（‘immanent’, see Langacker 1999:303）ということである。つまり〈図7a〉のように、複数のイメージ・スキーマが重なって存在するのだが、*childish* や *boyish* の場合は容器が焦点化されるが、*yellowish* の場合は〈図7a〉の楕円で囲まれた部分が抽出され、〈図7b〉のように、一次元的なスケールへと焦点が移る<sup>18)</sup>。〈図7b〉において、実線の矢印が *yellow* にあてはまる範囲であり、太線矢印が *yellowish* で、点線になると、*not yellow* と判断される。

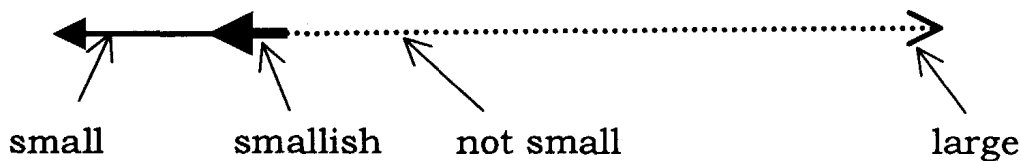


〈図7〉 色彩名称+ish におけるイメージ・スキーマ変換

上の二つの図の関係は、先に述べた *since* に関して二つの概念領域 (temporal & causal) で解釈が曖昧な用例が存在する場合と類似している。*yellowish* の場合、その曖昧さは二つの異領域間ではなく二つのイメージ・スキーマ間のものである。〈図7a〉は、名詞的な *yellow* を基盤にした *yellowishness* であり、〈図7b〉は形容詞的な *yellow* にもとづく *yellowish* の概念化といえるかもしれない。どちらのイメージ・スキーマも *yellowish* に関与している。〈図7a〉はメタファー的な *-ish*、例えば *childish*<sub>2</sub> の概念構造と同じであり、*childish*<sub>2</sub> などの概念構造からの類推として *yellowish* が生じる認知プロセスの自然さを意味する。しかしここで、〈図7a〉の《容器》スキーマから〈図7b〉の《尺度》スキーマに還元して *yellowish* を概念化できることが、次の「形容詞+ish」パターンへの拡張にとって重要な役割を果たすのである。

5. 3. 2 色彩+ishから 形容詞+ishへ

*yellowish* の概念構造が〈図7b〉の《尺度 (scale)》と解釈されるなら、このイメージ・スキーマは、「色彩名称+ish」全体の上位スキーマでもある。前掲の〈表1〉では、形容詞接続の -ish の初出が多くあらわれるのは16世紀後半であるが、この時期までに「色彩名称+ish」の大部分がすでに現れている事実から、この頃の英語話者には「色彩名称+ish」という言語クラスターが形成されていたと考えられる。そのクラスターの意味構造の一部として《尺度 (scale)》イメージ・スキーマが話者に定着していれば、さらなる生産力を持ち、〈図8〉のように形容詞に拡張適用されるのはごく自然である (Bybee 2001)<sup>19</sup>。微細な意味上の相違点としては、*yellow (ish)* の場合参照点が focal yellow という終点を持つ closed scale なのに対し、*small* の場合は、open scale であるという点がある。

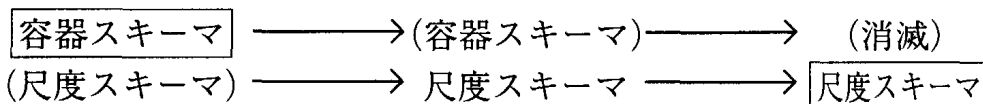


〈図8〉 形容詞+ish (*smallish*)

5. 3. 3 まとめ：イメージ・スキーマの重複とそのプロファイル・シフトとしての N+ish から A+ish への変化

ここで、N+ish から A+ish への派生接尾辞 +ish の統語環境および意味の変化の流れを、イメージ・スキーマの点から、まとめると以下のようなになる。最も前景化されているスキーマを四角で囲み、後景化しているものは丸括弧に入れた。

(19) メタファーの名詞+ish ⇔ 色彩名称+ish ⇔ 形容詞+ish  
 (*childish/boyish*) ( *yellowish* ) ( *smallish* )



「メタファー的な X (名詞) +ish」で前景にあるのは参照点として機能している X カテゴリーの《容器》スキーマだが、同時に《尺度》スキーマも並存する。「色彩名称+ish」では《尺度》が前景化され《容器》は逆に後景化されるが、「形容詞+ish」では《尺度》のみを引き継ぐ。(19)では、まさに接続詞 *since* で起きていたのと同類のプロセスが観察される。異なるのは、*since* では2つの領域が「時間 (temporal)」と「因果関係 (causal)」という意味的な概念領域であったのに対し、派生接尾辞 -ish の場合、2つのイメージ・スキーマの共存およびその間の焦点の移動ということである<sup>20)</sup>。

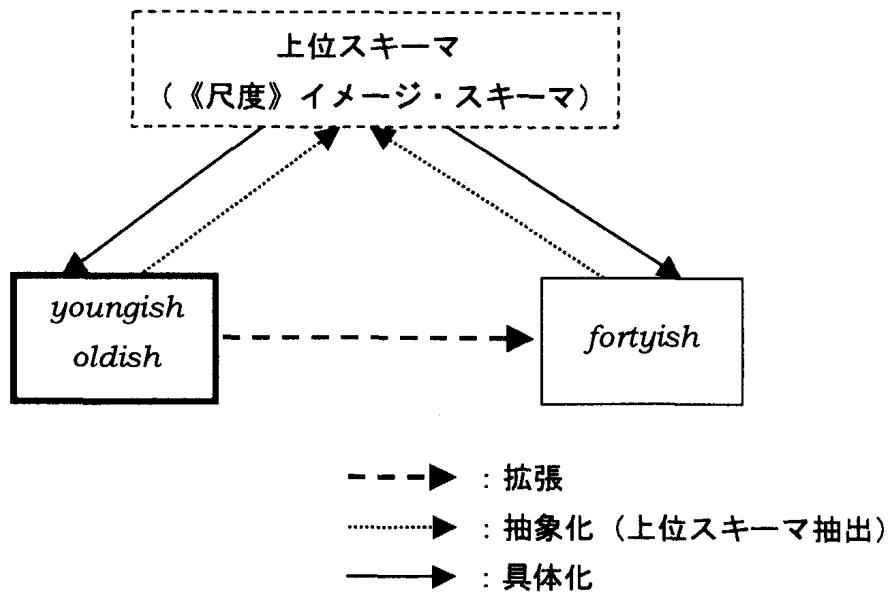
#### 5. 4. 形容詞 +ish から 数値 +ish (Numeral+ish) へ

*smallish* といった「形容詞+ish」から次の「数値+ish」へとさらに語基の範囲が多様化してゆくのは、すでに《尺度》スキーマが接尾辞 -ish の抽象的な概念構造として定着していれば何の不思議もない。数値こそまさに一次元のスケールそのものなのであるから。しかしながら、〈表1〉の OED の初出年をみると興味深いことが一点ある。「数値 +ish」の形で一番初めに現れているのは、1821年初出の *fortyish* である。この初出 *fortyish* は「1940年代に特有の、1940年代的特徴を持った」という意味ではなく「年齢が40歳前後の」という意味である。

(20) A sort of Tom Shuffleton grown flat, staid, and *fortyish*.

(*Oxford English Dictionary*, 2nd ed. CD-Rom 版)

ここで注目すべきは既に先行する「形容詞 +ish」の具体事例 *youngish* と *oldish* (〈表1〉では初出はそれぞれ1667年と1668年) である。これらの事例は人の年齢に意味領域を限定した表現である。これを基にすれば、*fortyish* はその同じ意味領域をさらに数値によって精密化しただけと考えることができる。*fortyish* は、「形容詞+ish」全体に一般化した高度に抽象的な《尺度 (scale)》スキーマからの生成ではない、と言える。つまり、*oldish* や *youngish* の「年齢層」というより具体的な意味内容が *fortyish* への意味拡張の派生元となっているということである。このことを、プロトタイプにもとづく新しい用法のカテゴリー化とそれに伴う上位レベルのスキーマの抽出、という意味ネットワーク構造 (Langacker 1999) から説明すれば、次の〈図10〉のように表される。



〈図 10〉意味のネットワーク構造

〈図10〉で、*youngish*、*oldish* の枠線が太いのはそれだけこれらの語彙が定着していることを示す。この時点では、*fortyish* は新しく作られた拡張事例なので定着度は比較的 low、それに従い枠線は細い。また、上位スキーマがこの二つから抽出されて、話者の言語知識として存在するかどうかはわからない。上位スキーマの定着度というのは、それぞれの表現や話者により程度差がある。*fortyish* の場合、上位の《尺度》イメージ・スキーマからの具体化として産出されたのではなく、*youngish/oldish* といった、「年齢層」という特定された意味領域のより具体的な事例からの拡張（年齢の詳細化）というプロセスにより派生された可能性が高い。そのほうが、意味の拡張の度合いが小さく、カテゴリー化する際の基本形（*youngish*、*oldish*）からの逸脱が最小だからである。

言語知識の一般化・抽象化（スキーマ）には様々なレベルがある。認知言語学と対峙する伝統的な言語学のアプローチでは、言語知識の経済性を重視するが故に、最も抽象的でより多くの言語データを産出できる高度な一般化が望ましいとされてきた。しかし認知言語学では、特に「用法依拠モデル (usage-based model)」（Langacker1999、Bybee2001、その他）という考え方においては、抽象的な文法知識とより具体的な個々の事例は並存し、言語知識とは冗長 (redundant) なものであり、具体的事例がなければそもそも抽

象化が生じるはずがなく、抽象的表象が生じたとしてもその基盤となった具体事例が言語知識のシステムから消去されることはない、という考え方をとる。この考え方においては、高度に抽象的なレベルのスキーマよりも具体性のある低いレベル（のスキーマ）の方が言語のカテゴリー化には重要であり、言語知識とは具体的使用例のカテゴリー化に基盤を持つものである、と想定される。

この用法依拠モデルに従えば、「形容詞+ish」から「数値+ish」への拡張という高度に抽象なレベルでの拡張パターンも、実は *youngish/oldish* から *fortyish* というより具体的なレベルにおける、「意味（年齢層）」と「形式（X+ish）」の両極での同一性（identity）または類似性（similarity）によるカテゴリー化としてとらえることができるのである。

「年齢+ish」から「西暦年代+ish」への意味的拡張は流行や物の叙述にこの形式が使われるようになったためであろう。また *fiveish* や *sevenish*, *noonish* といった「時刻+ish」は、現代口語英語ではよく耳にするが OED には掲載されていない。時刻は時間領域という一次元概念の線上の特定の一点であるが、「時刻+ish」ではある幅をもった区域を指示することになり、文法カテゴリーは名詞である（*How about sevenish?*）。ここまで意味拡張した接尾辞 -ish は、*boyish* や *devilish* の場合と異なり語基 X の文法カテゴリーを変える機能を失っている。一方 *reddish* や *coldish* に付随する -ish と比較すると、形容詞を産出する機能を失っているという点で異なるが、語基 X の文法カテゴリーを変化させないという点では共通している。したがって (21) に示したように、「時刻+ish」は表面的には N+ish に見えるが、接尾辞 -ish の意味機能という観点からは、より A+ish に近いといえる。

(21)	形容詞を作る	語基のカテゴリーを変える
N+ish ( <i>boyish</i> )	○	○
A+ish ( <i>coldish</i> )	○	×
時刻+ish ( <i>threeish</i> )	×	×

## 6. おわりに

本稿では、英語形容詞接尾辞 -ish について、歴史的な発生順序とその意味拡張プロセスを、イメージ・スキーマという概念領域から説明した。-ish の多義構造は、イメージ・スキーマ、特に《容器》と《尺度》の2つのイメー



ジ・スキーマの重なりとその焦点の移動という認知プロセスから自然な説明が可能であることを示した。またこの意味拡張は、接尾辞という文法的要素の意味が増加していくことでもあるので、文法化プロセスとも考えられること、そして他の文法化プロセスと同様に、AからBへの意味変化は異なる領域に一足飛びに飛躍的变化をしてしまうのではなく、{A or B} という曖昧な事例を仲介にしてBに変化するという段階があり、-ishの場合はその曖昧な二つの異領域が、共発生的な2つのイメージ・スキーマ（容器と尺度）であることを明らかにした。

言語形式は恣意的に新しい意味を付け加えていくわけではなく、共時的にみて多義的な言語形式の複数の意味は、何らかの動機づけのもとに歴史的に発展してきたものである。このことは、語彙や構文についての多くの研究が明らかにしている。また認知言語学では、語彙 (lexicon) と文法 (grammar) の二分化を認めず、語彙も、助動詞や前置詞などの文法的要素も、さらに大きな構文構造も、どのような長さの言語単位もすべて、意味と形式のペアからなる構造体であり、一般認知能力に裏打ちされる同一のメカニズムによって成立しているとみなす。もちろん拘束形態素もこの範疇に入る<sup>21)22)</sup>。本稿は、派生形態素 -ish の多義構造もけっして恣意的ではなく、イメージ・スキーマ、メタファー、メトニミー、参照点構造といった認知言語学的な道具立てによって自然な形で動機付けられていること、意味と形式の関係が有契的であることを示した。

#### 注：

- \* 本稿は「日本言語学会 第122回大会」(2001年6月24日、一橋大学) および第8回国際認知言語学会 (2003年7月20～25日、スペイン、リオハ大学) において発表した内容に加筆・修正をしたものである。
- (1) 歴史的言語研究と共時的言語研究の総合の重要性を明確にした研究は数多くあるが、Sweetser (1990)、Heine, Claude and Hünemeyer (1991)、Hopper and Traugott (1993) などが代表的である。“panchronic” という用語は Heine, Claude and Hünemeyer による。
- (2) 「時刻の-ish」が〈表1〉に含まれていないのはこの用法がOEDに見つからなかったことによる。
- (3) 「イメージ・スキーマ」とは、メタファー、メトニミー、参照点構造などといった認知メカニズムと矛盾するものではなく、むしろ同時に成立しうる認知構造である。あるいは、イメージ・スキーマの方がよ

り基本的と言ってもよいかもしれない。

- (4) *English* の場合、語源は *englisc, aenglisc* (OE)、意味は「アングル族の」。語基の *Angles* は、ローマ軍の撤退後、ブリテン島に移動し定住したゲルマン系部族のうちのひとつアングル族のことで、後にいわゆる ‘*English people*’ 全体を指すようになる。ちなみに *England* は *Angels’ land* 「アングル族の土地」に由来する (中尾1989:102-3)。*English* は *Scottish* や *Danish* と比較すると、語基 (base) + 接尾辞 (-ish) に分けて認識できる度合い (analyzability) が低いといえる。
- (5) *She is so English. He sounds very English.* のように、*English* を段階性のある形容詞として使うことも可能であり、このような古典的カテゴリーとプロトタイプカテゴリーとの間でのカテゴリー構造の変換については、清水 (2002) でも簡単にふれた。同様の例としては、*Jane was very married. Sally is very pregnant.* (Croft and Cruse 2004) などがあげられる。
- (6) Lakoff (1987) ではこれをイメージ・スキーマ変換とよび、Langacker (1987) では focal adjustment と呼ぶ。
- (7) 注の (5) を参照。「イギリス人らしさ」という程度を表わす、段階性を持つ *English* と、国籍などの非段階的 *English* を、ここでは関連はするが意味の異なる多義として扱う。ここで問題にしているのは後者のみ。
- (8) 均質な古典的カテゴリーの内部にプロトタイプを中心とした段階性 (尺度) を重ね合わせるというカテゴリー内部の再編成 (ある種の概念操作) によって、ほとんどのプロトタイプ効果を説明することができる。「トリ」カテゴリーも専門家にとっては離散的で均質な古典的カテゴリーと考えられようが、そこに「良いトリ」と「悪いトリ」という差を心理的に生じさせるプロトタイプ効果とは、まさに単なる《容器》イメージ・スキーマで区切られた《中・外》の内部に、中心へと向かい強まる「事例の良さ」という《尺度》イメージ・スキーマをインポーズすることである。Taylor (1989: ch.4) の言葉を借りれば、「同じカテゴリーに対して、同一の話者の内に、プロトタイプによる表象とスキーマによる表象が共存する」ということになる。
- (9) 語基が名詞ではなく形容詞の *Xish* は、比較級や最上級がつかれない。  
\**Today is more coldish than yesterday. \*This winter is the most coldish.*  
また、*very* などの程度副詞で修飾することもできない。*\*It is very*

*coldish today*. つまり「名詞+ish」とは異なり、「形容詞+ish」は非段階的形容詞をつくる。この二つの -ish の統語的振る舞いの違いについては稿を改めて論じたい。

- (10) Lakoff は、概念構造とプロトタイプ効果の間には直接的関連性があるといい、その関連する概念構造の一つはカテゴリーへの帰属度の程度差を表す尺度 (scale) を含んだ認知モデルである、と言っている。  
...there do exist direct correlations between conceptual structure and prototype effects. They are of two types: cognitive models containing scales that define gradations of category membership and radial categories. (1987:152, 下線：筆者)
- (11) Langacker (1987) によれば、「時間」「音階」「温度」などが一次元の基本領域である (p.150)。また領域 (domain) と次元 (dimension) の違いについて、両者の区別はあまり明確なものではなく便宜的でもあると言っている (1987:150-152)。

また、boyishness という特性を一次元化して一本のスケールで表し、すべての少年たちを何らかの形で評価して、その一次元のスケール上に位置づけることも可能ではあるが、膨大なパラメーターが boyishness にどれほど貢献するかの重み付けを決定しなければならない、という問題があり、結局は boyishness の一次元化は恣意的にならざるをえない。

- (12) メトニミーとメタファーは別個の独立した認知プロセスではなく、相互に関係があるという指摘は多い (Dirven and Pörings 2002 など)。意味拡張や文法化において、メトニミー・プロセスの方が先立ち、メタファー・プロセスはそれに基づいているという指摘については Taylor (1989:138) や Heine, Claudi and Hünemeyer (1991:ch.3) を参照されたい。以下に一例を引用する。

Metonymy and metaphor are considered by many scholars to be mutually exclusive phenomena of human conceptualization. ...we will endeavor to demonstrate that metonymy and metaphor, at least metaphor of the “emerging” type, are not mutually exclusive but rather complement each other—that is, that a development from a lexical item to a grammatical marker might not be possible unless there is an intermediate stage whereby distinct conceptual domains are bridged by means of a metonymical understanding. (HCH 1991:70, 下線：筆者)

- (13) 《つながり (link)》のイメージ・スキーマについては Johnson (1987:117-119) を参照。この単純なイメージ・スキーマが基盤となり「類似性」が知覚可能となる。二者間の比較とは、何らかの類似性を持つがゆえにその共有された特徴によってこの二対象が概念化者の認知空間の中で「つながって」概念化され、その対象間の距離を「近い」あるいは「遠い」と判断するためである。この「つながり」の距離とは実世界での物理的距離とは無関係である。
- (14) attraction イメージ・スキーマについては Johnson (1987:47-48, 126) および Clausner and Croft (1999:15) を参照。前者の邦訳では「牽引」と訳されている。
- (15) Conceivably, metonymy is the more basic component ... in that metaphor is grounded in metonymy... (Heine, Claude and Hünemeyer 1991:74)
- (16) 「色彩名称 +ish」の仲介的役割については、すでに言語記述としては指摘されている。たとえば Marchand (1969)。
- (17) Gary Holland 教授 (カリフォルニア大学バークレイ校) より、OED の初出年は出典データが存在するというを示しており、それ以前に使用されていたことを否定するものではない、という指摘を受けた。
- (18) 一本のスケールに焦点が移動するというより、多次元であった yellow が、一次元の yellow スケールに還元されてしまう、と考えたほうがよいかもしれない。この多次元から一次元への還元は、実はメタファーの -ish (*boyish*) においても概念操作として可能である。様々な詳細化・具現化の可能性がある *boyish* であるが、それらをすべて抽象化して *boyishness* という一次元のスケールにまとめることはできる。本文の (17) および注の (11) を参照。
- (19) Bybee (2001) の用法依拠モデルを参照。Bybee によると言語使用の頻度には 2 種類ある。タイプ頻度とトークン頻度であり、語彙の生産性に関与するのは前者。タイプ頻度とは、ある形式が具体的事例としてどれほど異なる表現を作り出すかという問題で、たとえば英語の複数形接尾辞を考えると、文字形式では -s が最も多い (*dogs, cats, books, movies...*)。このタイプ頻度が高ければ高いほど、一般性の高いスキーマを抽出しやすく、またこのスキーマが言語知識として定着して、結果としてこのスキーマはさらに新しい事例を生み出す高い生産力を持つようになる。新しい名詞語彙が誕生した場合、-s を使って複数形を作る可能性が高くなるということである (*ex; modem-s*)。

- (20) Clausner and Croft (1999) は、イメージ・スキーマも領域 (domains) としてみなしている。
- (21) ...morphological and syntactic structures themselves are inherently symbolic, above and beyond the symbolic relation embodied in the lexical items they employ. (Langacker 1987:12)
- (22) 派生形態素の多義構造を認知言語学的視点から考察した他の研究には、動詞から名詞を派生する -er に関するものがある (Ryder 1999, 2000, Panther and Thornburg 2001, 2002)。

### 参考文献：

- Barlow, Michael and Suzanne Kemmer (eds.) 2000. *Usage-based Models of Language*. Center for the Study of Language and Information.
- Bybee, Joan L. 2001. *Phonology and Language Use*. Cambridge University Press.
- Clausner, Timothy C. and William Croft. 1999. "Domains and image schemas." *Cognitive Linguistics*. 10(1). pp.1-31.
- Croft, William and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge University Press.
- Dirven, René and Ralf Pörings (eds.) 2002. *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Mouton de Gruyter.
- Heine, Bernd and Ulrike Claude and Friederike Hünemeyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge University Press.
- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind: the Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. University of Chicago Press.  
(邦訳：『心のなかの身体－想像力へのパラダイム転換』菅野盾樹 中村雅之訳 紀伊国屋書店)
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar. Vol.1: Theoretical Perspective*. Stanford Univ. Press.
- Langacker, Ronald. W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: the Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald. W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.

- Marchand, Hans. 1969. *The Categories and Types of Present-day English Word-formation*. 2nd ed. Bech.
- Panther, Klaus-Uwe and Linda L. Thornburg. 2001. "A Conceptual analysis of English *-er* nominals". *Applied Cognitive Linguistics II: Language Pedagogy*. Mouton de Gruyter. pp.149-200.
- Panther, Klaus-Uwe and Linda L. Thornburg. 2002. "The Roles of metaphor and metonymy in English *-er* nominals". In R.Dirven and R.Pörings(eds.), *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Mouton de Gruyter. pp.279-319.
- Ryder, Mary Ellen. 1999. "Bankers and Blue-chippers: an account of *-er* formations in present-day English". *English Language and Linguistics*. 3. pp.269-297.
- Ryder, Mary Ellen. 2000. "Complex *-er* nominals: where grammaticalization and lexicalization meet?" *Between Grammar and Lexicon*. John Benjamins. pp.291-331.
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press.
- 長滝祥司 1999 『知覚とことば—現象学とエコロジカル・リアリズムへの誘い—』ナカニシヤ出版
- 中尾俊夫 1989 『英語の歴史』講談社
- 清水啓子 2002 「派生接尾辞 *-ish* の多義構造 (一)」熊本県立大学文学部紀要 第8巻第2号 pp.25-44

*BNC, British National Corpus*

*OED* 1994, *The Oxford English Dictionary* (2nd ed), on Compact Disc, Oxford University Press.